

E・F・シューマッハーの現代経済学批判と「超経済学」の構想

E. F. Schumacher's Critique of Modern Economics
and His Idea of Meta-economics

三浦 永光

MIURA, Nagamitsu

E・F・シューマッハー（1911-1977）の『スモール・イズ・ビューティフル』（1973年）が出版されてからすでに40年以上の年が経った。この間に世界の政治的・経済的状況は大きい変化を遂げた。ソ連の崩壊と市場経済のグローバル化、米国同時多発テロとアフガニスタン戦争ならびにイラク戦争、米国のリーマン・ショックが引き起こした世界的金融危機、新興国（BRICS）の台頭、温室効果ガス削減交渉の停滞と異常気象による自然災害の世界的頻発、チェルノブイリと福島原発事故などを見れば、時代の変化の大きさとそこに含まれる問題の深刻さは明白である。本論文はシューマッハーが1970年代に提起した諸問題と彼の示した克服の方向を概観し、それが現在の時代状況から見てどのように評価できるかを検討することを目的とする。シューマッハーの思想の特徴は、現代資本主義と現代経済学を批判的に考察するさいに、純粋に経済学的な枠組みと範疇の範囲内にとどまらずにそれを超えた人間学的、哲学的、さらには形而上学的な視野の中で論じていることにある。本論文ではこのことに特別に注意を払いつつ考察したいと思う。

1 現代資本主義と現代経済学

シューマッハーは現代資本主義および現代主流経済学を次のように見ている。彼は、資本主義は生産手段の私有制の下で、各人が市場を通して自己利益

を追求するシステムであるという。そして現代の市場はすべての物事（需要、財、サービス）の質的相違を解消して商品化し、価格という数量に一元化して扱う。シューマッハーによれば、その結果として、自然界の生物ばかりか、人々の労働と身体までもが商品化され、人々の生命の尊厳と自然の生態系の価値が下落する。彼はいう。「市場では、現実的な理由から、個人と社会全体にとってきわめて重要な質的区別というものが全く認められない。区別が表面に現れることは許されない。したがって量が市場を支配し、君臨する。一切のモノが同等と見なされる。ということは、値段がつけられ、相互に交換できるようになるという意味である。経済学の考え方というものがこの市場にもとづく限り、生命の中から神聖さが失われてしまう。値段のつくものには神聖さはありませんからである」（Schumacher 1973:41, 邦訳 59-60）。たしかに、市場は人間の価値を認めはするが、しかしそれは人間の価値をその生産性によって、また人間の幸福を物質的消費の量によって測る人間観にもとづいている。彼はいう。「断片的な人間像の一例が今日の経済学信仰による人間像である。そこでは、人間を第一に、そして本質的に消費機械と見る。人間の価値を測る尺度はいわゆる生活水準であり、その意味するところは一年間に人が消費できるモノの価格である。そして集団として見ると、人間の消費は生産に依存しているのだから、

人間は同時に生産機械として眺められる。その価値を測る尺度はその生産、生産性である」

(Schumacher 2004:89, 邦訳 123-4)。このように現代の資本主義と経済学は人間の幸福、したがって人間の目的が物質的富の獲得と消費にあると見ている。それゆえ人間の価値は富の生産への貢献度によって測られる。この見方を社会全体に広げれば、社会全体の価値尺度は国民総生産 GNP (または国内総生産 GDP) とその年間成長率である。したがって国の経済政策の目標は生産の極大化と消費の極大化 (GDP の際限なき成長) である。現代の主流経済学 (新古典派経済学) もたえざる成長が望ましいという前提に立っている。

これに対してシューマッハーは生産・消費のたえざる増大がもたらす深刻な結果として化石燃料の枯渇、自然資本の食い潰し、人間性の浸食の三点を挙げる。まず化石燃料の枯渇については、彼は英国石炭公社の経済顧問としての経験にもとづいてすでに 1954 年に (1972 年のローマクラブの『成長の限界』より 18 年も早く) 化石燃料の枯渇の見通しを発表した (Kirk 1983 : 31-38, 58; Wood 2011 : 187-188 邦訳 247-248)。第一次石油ショックと同年に出版された『スモール・イズ・ビューティフル』では、彼は「資本の大部分は自然からもらうのであって、人間が造り出すものではない。ところが、人はそれを資本と認めようとさえしない。そしてこの自然という資本が今日驚くべき勢いで使い捨てられている」とのべ、自然資本の第一の例として「化石燃料」という再生不可能資源を挙げている。第二は、生物資源の急速な減少である。人間が毎年消費する動物資源と植物資源の量と排出する廃棄物量は自然が毎年再生産する生物資源量と廃棄物吸収能力の範囲内に収まらなければ、人間は安定的に生活することはできない。もし人間がその範囲を超えて消費・

廃棄を増大すれば、いわば元本としての自然資本を食い潰し、やがて人間は生存の危機に瀕することになる。第三点は人間性の浸食である。シューマッハーは「今日の生産方法が工業社会に住む人間の人間性を蝕んでいることは明白ではあるまいか。…人間性は国民総生産では測れない。測れるのは、それが失われたときに現れる徴候だけであろう」とのべ、

「犯罪、麻薬、暴力行為、精神障害、反抗など」の徴候を挙げている (Schumacher 1973:17, 邦訳 26-7)。これらの徴候は激しい競争の中で敗れた人々が自己の居場所と自尊心を失った状態の表現であろう。

しかしシューマッハーは他方で、経済成長という社会の目標が、競争の敗者を尻目に、貪欲と競争心を助長し、その結果として非物質的価値を軽視する風潮を広めている事態を指摘する。彼はいう。「経済成長を国の最高目標とすると、不可避免的に貪欲、焦慮、粗暴と嫉妬を増長させ、どんな社会でも満足な運営に欠かせない基本的な美德をこわしてしまう」

(Schumacher 2004:92, 邦訳 129)。経済成長を国の目標とし、営利追求、競争を各人の目標とするならば、「正義、調和、美、健康などを含む非物質的価値」は不要なもの、少なくとも第二義的なものにすぎないとされる。ここでいう「正義、調和」とは、社会の中の貧富の格差が限度を超えないこと、また国際間にも富と力の著しい不均衡がないことを意味している。「美、健康」とは、自然の景観の美、都市と農村の生活環境の清楚な秩序、および人間が環境の汚染や破壊から守られ、健康な生活を享受することを指している。成長と競争を偏重する経済・政治はそれらを危機にさらすことになるのである。シューマッハーがここで指摘する成長至上主義社会の弊害、すなわち「人間性」の浸食や「正義、調和、美、健康」の損失は、主流の経済学においては、損失として取り上げられることはなく、無視さ

れていることに注意したい。彼は既存の経済学の枠組みを超えた視野に立って、現代経済学を「物質主義の哲学」、あるいは「物質的所有と消費といわゆる生活水準を偶像崇拜する」ところの「経済学という宗教」と特徴づけている。

以上のことと関連して、シューマッハーは規模の巨大化の傾向の問題を指摘する。市場における競争と効率の追求はたえず企業組織の大規模化、技術の巨大化を促進する。また国家の行政機関も固有の権力拡大志向と効率性のために巨大化を志向する。企業は市場の拡大を求めて、合併や買収によって組織を大規模化する。しかしシューマッハーによれば、組織が大規模になればなるほど、諸個人はますます多くの複雑な規則によって判断能力と行動の自由を制限され、仕事への意欲を失い、組織の中の人間関係が形式化する。また組織は自己の保全と拡大を自己目的とするようになり、社会の利益に反する行動をとることも辞さない。彼は言う。「大規模組織はしばしば悪事を行い、反道徳的で、愚劣で人間性に悖る行動に走るが、それは組織内部の人間の性格によるのではなく、ただ組織が巨大さの重みを引きずっているからなのである」(Schumacher 2004:57, 邦訳 84)。

また技術については、企業は大量生産のために省力技術を開発し、「大きさ、速さ、力」を可能な限り高めた「巨大技術」を追求する。しかも技術はいったん高度に発達すると、技術固有の論理にしたがってますます高度化し、抑制することが困難になる。その結果、高度な技術の力は、兵器や原発のように、破壊性と暴力性のリスクを帯びるといふ。

さきに、成長主義社会が環境破壊による自然の景観美と人間の健康を侵害するというシューマッハーの議論を見たが、彼は現代経済学が成長政策の必要を説く一方、環境悪化の問題を正面から取り上げな

いことを批判する。すなわち経済学は経済活動のコストの中に自然環境を、私有物としての土地・自然資源を例外として、含めていない。彼は「人間が自然界に依存している事実の無視が経済学の方法論に内在した性格である」とのべ、「市場は社会の表面を反映しているにすぎず、その意義はその時々瞬間的な状態に関することだけである。物事の深層の究明やその背後にある自然界や社会の事実の吟味は含まれていない」と批判している (Schumacher 1973:40, 邦訳 58)。

これと関連して、シューマッハーは現代経済学が本質的に短期的繁栄を重視し、長期的な安定を軽視することを指摘する。彼は「経済学の判断は長期より短期をはるかに重く見る」とのべ、「現代の豊かさの蹉跎の原因は…誤った優先順位、すなわち束の間の財の極端な重視と永遠なものの徹底した過小評価にある」といふ (Schumacher 1973:39, 邦訳 57; Schumacher 2004:81-82, 邦訳 117)。その顕著な例が先に触れた、成長のための生産の極大化と自然資源の乱費である。その結果が再生不可能資源(化石燃料)の枯渇、再生可能資源の急速な減少であり、気候変動の被害と負担を将来世代に転嫁することである。

以上のように、シューマッハーは現代資本主義と現代経済学がはらむ問題点を多角的に分析し、次いでその克服の道を論ずる。

2 全体的人間 (The whole man) の思想

シューマッハーはいふ。「あらゆる学問分野は、どんなに専門分化していても、一つの中心と結びついている。…中心を形づくっているのは形而上学と倫理学である」(Schumacher 1973:85, 邦訳 120-1)。彼のいう形而上学とは、宇宙(または自然)とその運動と秩序を支配する力をもつ根源的存在に関する

見方、また人間がその宇宙の中で占める位置と自己の本性に関する見方である。倫理学とはその人間本性に適った生き方に関する教説である。したがってシューマッハーによれば、いかなる経済学も一定の自然観と人間観を、暗黙のうちにであれ、もっているという。上に見たシューマッハーの現代経済学の分析においてもすでに、それが前提している特殊な人間観がある程度示された。本章では、シューマッハー自身の形而上学と人間観を概観し、それが現代経済学のそれとどのように異なるのかを明らかにしたい。

シューマッハーによれば、宇宙は鉱物（または物質）、植物、動物、人間という四つの段階ないしレベルから成るといふ。鉱物と植物の間には生命という断絶ないし飛躍が、また植物と動物の間には意識の有無という断絶がある。そして動物と人間の間には精神の「自覚」という飛躍があるという。このように宇宙は四つの異なった存在のレベルの階層的構造をなしている。人間はこの構造の中で鉱物の要素、生命の要素、意識の要素、自覚の要素のすべてを自己の内にもっており、物質、生命、意識的生命としての動物、精神（spirit）を包含する四重の存在である。人間は身体的存在、また生命的存在として自然界に連続し、これに依存し、これと深い「相応性」をもっている。しかし人間は動物とちがって精神という自覚の能力をもち、世界と社会の中の自己を内省し、宇宙全体と自己の関係を認識する潜在能力をもっている。精神は外界を理性的に認識する能力をもつだけでなく、道徳的・審美的・宗教的認識能力、意志と行動の自由をもつ人格であることを自覚する。シューマッハーによれば、このような形而上学的理解は西洋のアリストテレスやトマスおよびインドのヒンズー教や仏教の思想家によって認識され、以後、継承されていた。しかし近代にいたって、このよう

な存在の次元の質的区別を認めない哲学が現れた。デカルトの数学的・機械論的自然観と科学技術による自然支配の思想。物質的消費と幸福を同一視するベンサム功利主義。人間を利己心にもとづいて経済活動する存在と規定し、市場における商品取引の社会的総量（国民総生産）の増大を社会の最高目標として追求する近代経済学。哲学・道徳・芸術・宗教などの精神的文化をたんに人間の頭脳の意識の産物または物質的利害関係の反映（「上部構造」）と見なす「唯物論的科学主義」。人間を自然選択・適者生存による遺伝的進化の産物にすぎないとして、人間の精神と主体的自由の余地を否定する一部の進化論者など。シューマッハーはこれらの思想が科学技術の暴走、人間の幸福の要素としての物質的消費の偏重、生産と消費の限度なき増大への信仰などの現代の危機的状況をもたらした思想的原因であるとして批判する。そしてこの危機の原因を洞察し、その克服の道を見出すのが「英知」（wisdom）であるという。

英知は近代の主要な思想の価値観の偏向と不均衡を洞察し、人間の精神のもつ道徳的・審美的・宗教的能力を含む「全体的人間」の回復を志向する能力である。英知は第一に科学技術が道徳を排除している事態を指摘し、科学技術を推進する自然支配への欲望、人間の競争心、高慢を抑制することの道徳的可能性を重視する。英知はまた、経済学が人間の幸福をおもに消費による満足に求め、そのために生産を極大化することを個人にも社会にも期待する価値観を一面的な人間観と見なし、現実の人間がしばしば非経済的動機（社会的、道徳的、審美的動機）から行動することを指摘し、貪欲や嫉妬心（飽くなき富の追求と競争）への捕われからの脱却を説く。英知は人間の幸福を自然界の中の人間の小ささに応じた節度と簡素な生活（「足るを知る」）、社会的公正

と調和、自然に対する非暴力、健康、自然美の観賞に求めることを教える。

このようにシューマッハーは人間の生が物質的生産と消費という経済活動に尽きるものではなく、心と精神の多面的な能力を具えており、その能力の全面的な開発と活動によって「全体的人間」、つまり真の人間性をそなえた存在になりうることを主張する。彼はこのような人間観に立って、新しい経済思想を構想する。

3 超経済学の構想

シューマッハーは「超経済学」(meta-economics)の概念を導入する。この語はアリストテレスが自然学(physics)の背後にあつてその基本前提をなしている自然界の根本原理を究明する学として形而上学(meta-physics)を創始したことに対応して、経済学の基本前提をなす人間と自然の関係の根本原理を明らかにする学の名称として造語されたものである。彼は、すでに見たように、いかなる学問にも、したがっていかなる経済学にもその前提となっている一定の人間観と形而上学(人間と自然と根源的実在の関係)、またそこから導き出される倫理学があると見る。そのような観点から彼は、前章までに見たように、現代経済学が前提している形而上学と人間観を分析し、批判したのであった。本章では、人間と自然の関係に関する彼自身の見解と人間観がどのようなものであるか、またそこから彼の描く超経済学がどのような性格のものであるかを概観してみよう。

(1) 目的と手段の関係の転換

シューマッハーは現代資本主義の功利主義が物質的生活という、本来生活の手段であるはずのものを目的化し、本来目的であるべきものを葬り去るとい

う本末転倒の誤りを犯しているという。彼においては、人間生活の目的は人間性の発展と完成にある。すなわち、人間が仕事を通して身体的存在と社会的存在としての自己を展開するだけでなく、精神的存在としての基本的徳性(深慮・知恵、平等的正義への志向、行動への勇氣、節度、互助・博愛など)の実行に努めることが生活の意味と目的である。生産と消費、商品の交換・取引はその目的のための重要な手段ではあるが、人生の目的にはなりえない。しかるに現代文明は物質的富の獲得という手段を目的の地位にまで高め、本来の目的である精神的なものを追放し、人間性においては貧しくなった。彼の超経済学は人間生活の目的を再び目的の地位に回復し、経済生活をそれにふさわしい従属的な地位に戻す試みである。彼は、「経済学が環境の中の人間を扱うのと同様に、超経済学の目的は二つの部分から成り、一つは人間を扱い、他方は環境を扱うと期待してよい」という(Schumacher 1973:42, 邦訳 61)。シューマッハーはまず経済活動の中心にある仕事(work 働くこと)を取り上げる。そして、仕事の目的は三つあり、第一に、自己の能力を発揮し、働くことの喜びと誇りをもつこと、第二に他の人々との協力、第三に社会への財とサービスの提供であるという。仕事はたしかに一定の苦勞と苦痛を伴うが、しかしたんなる苦痛やコストに尽きるものではなく、身体と心の潜在的能力を伸ばし、他者と共働し、その成果を広く社会の人々に分かち与えることの喜びと満足と自信は生活にとって重要不可欠のものである。働く場所と手段をもたず、生活できないことは不幸である。しかし多くの財産をもち、働かず消費するだけの生活も決して羨むべきことではなく、個人としても社会的存在としても人間本来の重要な目的を欠いている。誰もが仕事をもつこと、すなわち完全就業が最優先されるべきである。

(2) 自給経済圏としての地域社会

1 で見たように、現代資本主義は経済成長を求めて企業、国家、技術が大規模化する傾向をもっている。シューマッハーはこの「巨大主義」がむしろ組織の機能と効率を低下させるだけでなく、人間の心を蝕み、自然を破壊する結果を招いていることを指摘した。政治が巨大な国家の権力と行政組織に握られ、経済生活が巨大な企業の資本の力によって動かされている事態の下で進行する権力の不均衡、貧富の格差、都市と地方の格差を克服するために、彼は規模の縮小を提案する。彼はこういう。「人間は小さな、理解の届く集団の中でこそ人間でありうる。そこで、数多くの小規模単位を扱えるような構造を考えなければならない。経済学がこの点をつかめないとすれば、それは無用の長物である」(Schumacher 1973:68, 邦訳 97)。人々の安定した生活と自然の資源と生態系を守り維持するためには、経済圏の規模を縮小し、地域社会を自給度と独立性の高い経済単位とすることが必要である。シューマッハーのいう地域社会とは、人口 150 万から 300 万程度の規模で、その内に多数のより小さい単位である地区を包含している。各地域社会は相互に緩やかな連合体を形成し、地域社会相互の補完的協力の調整的機関として国の権限が再編成される。必要なのは効率性のための「中央への集権化と規格化」ではなく、都市と農村の不均衡を取り除く「分権化と地方化」である。

地域における主要産業は、都市部は別として、農林水産業である。シューマッハーは農業の現状が工業並みの生産性向上を求めて農薬と化学肥料の多用、機械化省力化・集中化を進め、その結果、農産物の安全性と質の低下、土壌の劣化を招いていることの危険を指摘する。彼は農業と適切な土地利用は人間

と生き物の健康、自然の景観美、人間と自然の持続性の三つを目的としなければならないと訴える。シューマッハーは、農業の基本原理は、工業とちがって、生命ある物質を扱うことであり、自然界の生命の真理は循環の法則(物質循環、昼夜・四季の循環、生き物の生命のサイクル)、(環境と生物種の)多様化、分散化(動植物の分布)の三つであるという。農業はこれらの法則を認識し、これに順応しつつ、耕作と栽培を行わなければならない。彼は農業の目的は三つあるという。すなわち、第一に、脆い存在である人間が生きた自然界との結びつきを保つこと、第二に、人間の生存環境を人間に適したものに換え、これを気高いものにすること、第三に、人間らしい生活を営むのに必要な食糧と原料を産出することである。

人間は農業のほかに工業をも必要とする。しかし工業は、市場価値中心の現代において広く信じられているように、農業以上に重要なものではない。反対に、農業は工業以上に人間の基本的な営みであり、この関係にふさわしい農工間の均衡が必要である。

(3) 地域社会と結びついた企業

シューマッハーは自然が人間の経済生活の基本前提であるとのべ、とくに地水火風の四大要素についてこういう。「空気、水、土、火の四つは超経済的要素である。人の手になるものではないが、人はこれらの四大要素に依存している。これらを求める価値があるのは、それらがある目的のための手段としてではなく、目的そのものとしてである」(Schumacher 2004:172, 邦訳 243)。また土地に関してこういう。「もちろん、土地とその上に住む生物は〈生産要素〉、つまり目的のための手段ではあるが、そのことはそれらの二次的な性格であって、一次的性質ではない。土地と生物は何よりもまず目

的そのものであり、超経済的なものである。したがって、土地はある意味では聖なるものと言っても、事実の言明として合理的な正当性をもっている」(Schumacher 1973:97, 邦訳 139)。

空気と水は人間が一瞬たりとも欠かすことのできないものであり、土地は人間の毎日の食べ物を生み出す根源であり、また火はエネルギーまたは熱としてやはり人間に欠かせないものである。これらは人間のためのたんなる手段であるにとどまらず、人間が全面的かつたえず自己の生存を負っているものであるから、目的、または超経済的なものと言われる。したがってこれらの要素はたんなる私有物または商品として扱ってはならないものである。

ではシューマッハーは生産手段の私有制を廃止して共有制にすべきだというのだろうか。彼は私有制と共有制を二者択一的には捉えず、私有制と市場経済を存続させつつ、これに一定の枠組みを設定し、地域社会の中に共有制と計画の可能性を生み出そうとする。その理由として、彼は私有権には二種類あり、両者の区別が重要であるとして、こういう。

「私的財産について第一の最も基本的な事柄は、(a) 創造的な仕事の助けとなる財産と、(b) 創造的な仕事を排除する財産とを区別することである。(a)には自然で健全な要素がある。自営業者の個人財産がそれに当たる。他方、(b)には不自然で不健全な性格がある。みずから働かず他人の労働に寄生する人の個人財産がそれである」(Schumacher 1973:245, 邦訳 343)。(a)と(b)を分けるものは企業の規模の大きさであり、中規模の企業になると、(b)の性格を帯び、私有権による他者の労働の搾取が始まり、大企業はあっというまに不合理であるという。企業の所有者だけが利益を取り込むのは公正に反するから、従業員および企業が存在する地域社会が利益に与かるように変えるべきである。

そのためには、まず一定規模以上の企業は株式の半分を企業の所在地である地域の公共機関に無償で与え、代わりに法人税を免除される。公共機関は企業の利益配当の半分を受け取るものとする。

企業の経営上の権利・義務の行使は社会評議会に与える。評議会は地域の労働組合代表、経営者団体の代表、専門職業団体代表、陪審員から構成される。

企業は一方では収益性を追求しつつ、他方では経営に当たって従業員および地域の人々の総合的で幅の広い人間性の発展(地域の健全な環境の保全と住民の健康、文化的豊かさ)に貢献する責任を負う。こうして企業と地域社会が密接に結びつき、その結果、地域社会が自給力を増し、なかば自治的な単位となる。

(4) 自然資源と永続性

第一章で見たように、シューマッハーは現代の環境悪化と資源減少の問題が現代資本主義の経済成長追求に起因しているとする。彼は環境・資源問題を根本的に捉えるためには四つの種類の財を区別することが重要だという。すなわち、まず一次財と二次財の区別である。前者は自然界の中に見出される財であり、人間が作ることができないものである。一次財はさらに再生不可能財と再生可能財に分かれる。前者は金属、化石燃料などの鉱物であり、後者は水、空気などの物質、また木材や穀物、魚介類などの生物資源である。二次財とは人工物であり、工業製品とサービス(医療など)に分かれる。これら四種の財は相互に質的に異なっており、代替できないものである。ところが、市場ではこれらの財の質的相違が無視され、貨幣価値に一元化される。シューマッハーはここに環境悪化と資源問題の原因があるという。空気や水は市場価値をもたないため、汚染が放置される。再生不可能財である地中の化石燃料は有

限量であるにもかかわらず、加速度的に大量消費され、再生可能財である生物資源も過度に大量に消費されるならば、生態系の循環が損なわれ、再生能力を失う危険が増大する。それは破局への道である。

多くの経済学者は、環境資源問題は新たな科学技術の開発によって解決できると楽観的に語っているが、シューマッハーは、彼らが上にのべた財の質的区別と代替不可能性を認識せず、科学技術を過信しているという。彼は空気や水は、たとえ市場価値をもたなくても、すべての生命を支える超経済的存在であり、目的であるから、汚染防止と保護の政策が不可欠であると考え。また化石燃料の減少に対しては、これに代わる再生可能エネルギー資源の開発が急務であるという。生物資源の過剰消費に関しては、資源の年間採取量が資源の年間再生能力を超えてはならない。それによってはじめて人間とすべての生きものと自然の生態系が永続性を保証される。過剰消費の一時的繁栄とそれが引き起こす将来の破局ではなく、安定した永続性こそ、英知が重視するものである。

彼は「人間性の本当の欲求と、われわれの周囲の自然界の健康と、世界の天然資源と両立できるような、新しい生活様式を編み出す」ことの必要を訴える。彼のいう「人間性の本当の欲求」とは、物質消費の増大を幸福の尺度と考える現代功利主義のそれではなく、上にのべた「仕事」を通じて培われる「人間性の純化」である。いいかえれば、「消費は人間が幸福を得る一手段にすぎず、理想は最小限の消費で最大限の幸福を得ることだ」という生活観への転換である。

(5) 発展途上国の開発

先進工業国において発展途上国への開発援助の成功の基準とされているのは、普通、被援助国の GNP

の成長である。しかしシューマッハーによれば、これはおもに自然資源（化石燃料などの鉱物資源、農産物、木材など）の開発と輸出による外貨獲得を意味しているが、実際には貿易赤字の増大と先進工業国への依存（債務）をもたらし、大多数の民衆の一層の貧困化を招いている。

彼は、必要なのは財の開発ではなく、人間の開発であるという。自立と自給のための知識である。独立心をもつ人間形成の教育、地域社会の中での組織化と協力である。

途上国の貧困の原因は失業にある。開発の成果は国全体の生産高または所得（GNP, GNI）で測るのではなく、大多数の人々が仕事の機会を得て、最低限の生活の必要を満たせることを目標とすべきである。たとえ国民総生産は一時的に下がっても、完全就業を優先することが将来の自立への力になる。

輸出向けの産物の生産よりも、まず人々自身の生活に基本的に必要なもの（食糧、住宅用建材と薪、衣類、農機具）の生産に重心を移す。そのさい、地域で得られる自然資源を活用する。またその産物は地域内で交換し、循環する。こうして地域社会が農工業の自給的経済構造を作る。

技術は古い土着技術でもなく、先進国の大規模かつ複雑で高価な技術でもなく、両者の中間の新しい技術を開発する（中間技術）。農業および農産物の一次加工に必要な技術。人々の衣食住に必要な生産の技術。雇用を節約する資本集約的な技術ではなく、誰でも利用できる簡単で小規模の安価な技術である（適正技術）。

また地域社会が郷土への愛着と誇りをもてる特色ある文化的まとまりを育成する。

4 21世紀に受け継がれるシューマッハーの思想

冒頭にのべたように、時代状況はシューマッハー

の死後、環境・資源、開発、平和などのいずれの分野においてもいっそう危機的な状態に陥ったといえる。その中で、40年を経過した現在においても彼の思想のもつ意味は失われていないばかりか、むしろいっそう鋭く現代の窮境のよってきた根本原因を言い当てているといえる。以下、シューマッハーの思想が今もなお保持している意義と可能性を次の四つの点に絞ってのべてみたい。

(1) 再生可能なエネルギーと自然資本の不可欠性

われわれは現在、近い将来における化石燃料の枯渇と地球温暖化の切迫とに挟み撃ちされている。シューマッハーはこの危機を上記の四種の財の区別によつて的確に解明し、また生産（GDP）の無制限な増大による再生可能な自然資本の喪失と生態系の崩壊の危険を警告し、経済の「永続性」を提起した。この認識は現在、ハーマン・デイリーの定常状態と持続可能な発展の概念によつて一層明確に展開されている（Daly 1996；Daly and Cobb 1989；Daly and Farley 2004）。

(2) 地域社会の自給力向上への動き

1990年代以来の市場経済のグローバル化と巨大企業の支配力拡大に抗して、ヨーロッパ諸国の多数の地域社会においては、化石燃料と原子力発電から再生可能エネルギーへの転換が急速に進行している。住民と自治体、それに地元企業が一体となって地域の資源を利用して発電、地域暖房、給湯のシステムを作り、エネルギー自給率を高め、雇用をも創出しつつある。このシステムの運営組織の多くは住民の共同出資で設立されている⁽¹⁾。またこれと並行して、欧米や途上国で地産地消型の有機農業と持続可能な地域経済の自立を目指す多様なエコビレッジ（Eco-village）の運動が進行しているが（Dawson 2006）、

これもシューマッハーの「規模の縮小」と「民衆中心」（People matter.）の思想の発展と見ることができる。

(3) 発展途上国における人間の開発

上に見た地域社会の住民が主体となってエネルギー自給を開拓する運動は、先進国と途上国とを問わず、「必要なのは財の開発ではなく、人間の開発だ」というシューマッハーの思想と一致する。生産高や所得で測る経済開発ではなく、人々が地域の資源を活用して自らの生活の道を切り開く自由こそが大切だという人間開発の思想である。また、アマルティア・センが現代経済学の所得または効用重視の福祉観の限界を指摘し、人間の潜在能力（capability）を発揮する主体的自由こそが福祉の重要な要素だと主張しているのも、シューマッハーの思想を受け継ぐものであろう⁽²⁾。

(4) 人間の道徳的資性と市民（住民）の運動

シューマッハーは、現代経済学における倫理学排除の傾向に抗して、人間の精神的能力、とくに道徳的資性への信頼を繰り返し強調していたが、この可能性は現代においてNGO、NPOなどの自発的な市民活動や社会運動によつて行動に移されていると思われる。すでに見たように、シューマッハーはカトリックの古来の教えである「基本徳」が現代において見失われていることが現代文明の混迷の深い原因であると主張した。基本徳とは、英知（深慮）、平等と公正としての正義、節度（自己抑制）、勇気の四つである。英知は、現代文明がひたすら物質的繁栄を追求した結果として環境・資源問題に直面したことを見抜き、人間社会とすべての生命の「永続性」が物質的豊かさより上位の目標であるべきことを認識する。英知はまた、経済成長のための競争が人と

人、人と自然の間の敵対と暴力を生むゆえに、非暴力と平和を成長と競争よりも優先した位置におくべきことを教える。平等と公正としての正義という徳は、社会的および国際的な貧富の格差が深刻化している現代においてはしばしば忘れられているか、または意識的に遠ざけられている事柄である。節度（自己抑制）は、現代資本主義が生産・消費の極大化を追求することを通じて人々の物質的欲望の解放を煽り高めている状態では、冷笑され、あるいは反発を買いかねない生活態度であろう。しかしそれにもかかわらず、社会全体の中で見れば少数とはいえ、これらの徳性を復権させようと活動している人々が存在する。それが NGO, NPO の人々、またさまざまな社会運動に参加している住民や諸個人である。彼らは社会の中で、また国際社会において環境、平和、福祉、開発などの分野で活動している。彼らは先進工業諸国家と大企業が進める市場経済のグローバル化と成長政策が引き起こした環境破壊、国際紛争、社会的及び国際的な貧富の格差拡大などの被害者の救済やこれらの問題の原因克服に取り組んでいる。彼らは国家と資本の力から独立した立場に立って、持続可能でより公正な産業・技術・生活様式を自由な発想で、自発的かつ共同で実践的に創り、拡大しつつある。彼らの活動や運動の中にシューマッハーの言う「徳」——英知、正義、節度、勇気——の現代的な発露を見ることができよう。

注

(1) 飯田哲也 (2011), 滝川薫・村上敦・池田憲昭・田代かおる・近江まどか (2012)。日本の地域社会がエネルギー、農業、福祉において再生する実践報告として、藻谷浩介・NHK 広島取材班 (2013)。有機農業運動は欧米でも、たとえば「地域社会に支えられた農業」(CSA) 運動として広がっている。日本

でも、たとえば生産者と消費者の「提携」による有機農業運動を全国的に展開している日本有機農業研究会などがある。

(2) Amartya Sen (1987, 1992)。なおインドのラダック地域に関するヘレナ・ノーバーク＝ホッジの考察をも参照 (Norberg-Hodge 1991)。

参考文献

- 飯田哲也 (2011) 『エネルギー進化論』, ちくま新書
滝川薫・村上敦・池田憲昭・田代かおる・近江まどか (2012) 『100%再生可能へ！ 欧州のエネルギー自立地域』, 学芸出版社
藻谷浩介・NHK 広島取材班 (2013) 『里山資本主義』, KADOKAWA
Daly, Herman (1996): Beyond Growth, Boston. 『持続可能な発展の経済学』みすず書房, 2005.
Daly Herman and Cobb, John B. Jr. (1989) : For the Common Good, Boston.
Daly, Herman and Farley, Joshua (2004) : Ecological Economics, Washington/Coveloo/London.
Dawson, Jonathan (2006) : Ecovillages: New Frontiers for Sustainability, Schumacher Briefing 12, Green Books, Cambridge, UK 『世界のエコビレッジ』日本経済評論社, 2010
Kirk, Geoffrey (ed.) (1983) : Schumacher on Energy, London
Norberg-Hodge, Helena (1991): Ancient Futures: Learning from Ladakh, Sierra Club Books. 『懐かしい未来 ラダックから学ぶ』懐かしい未来の本, 2011.
Pearce, Joseph (2001) : Small is Still Beautiful, London
Robertson, James (1998) : Transforming Economic Life: A Millennial Challenge,

-
- Schumacher Briefing 1, Cambridge, UK. 『21世紀の経済システム展望』, 日本経済評論社, 1999
- Schumacher, Diana (2011) : Small is Beautiful in the 21st Century, Totnes, Devon, UK
- Schumacher, Ernst Fritz (1973) : Small is Beautiful: A Study of Economics as if People mattered, London 『スモール イズ ビューティフル 人間中心の経済学』 講談社, 1988
- Ditto (1978) : A Guide for the Perplexed, New York 『混迷の時代を超えて 人間復興の哲学』, 佑学社, 1980
- Ditto (1979) : Good Work, New York & London 『宴のあとの経済学』, 筑摩書房, 2011
- Ditto (2004) : This I believe and other essays, Totnes (Devon) , UK. 『スモール イズ ビューティフル再論』, 講談社, 2000
- Sen, Amartya (1987): On Ethics & Economics, Oxford. 『経済学の再生』 麗澤大学出版会, 2002
- Ditto (1992): Inequality reexamined, Oxford. 『不平等の再検討』 岩波書店, 1999
- Wood, Barbara (2011) : Alias Papa: A Life of Fritz Schumacher, Totnes (Devon, UK) 『わが父シューマッハー その思想と生涯』, 御茶の水書房, 1989

三浦 永光 (津田塾大学名誉教授)